

石川県白山自然保護センター編集

はくさん

特集 ブナオ山観察舎

第9巻 第2号

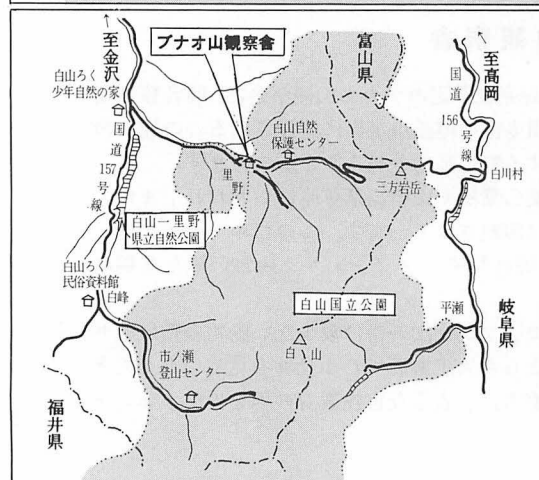
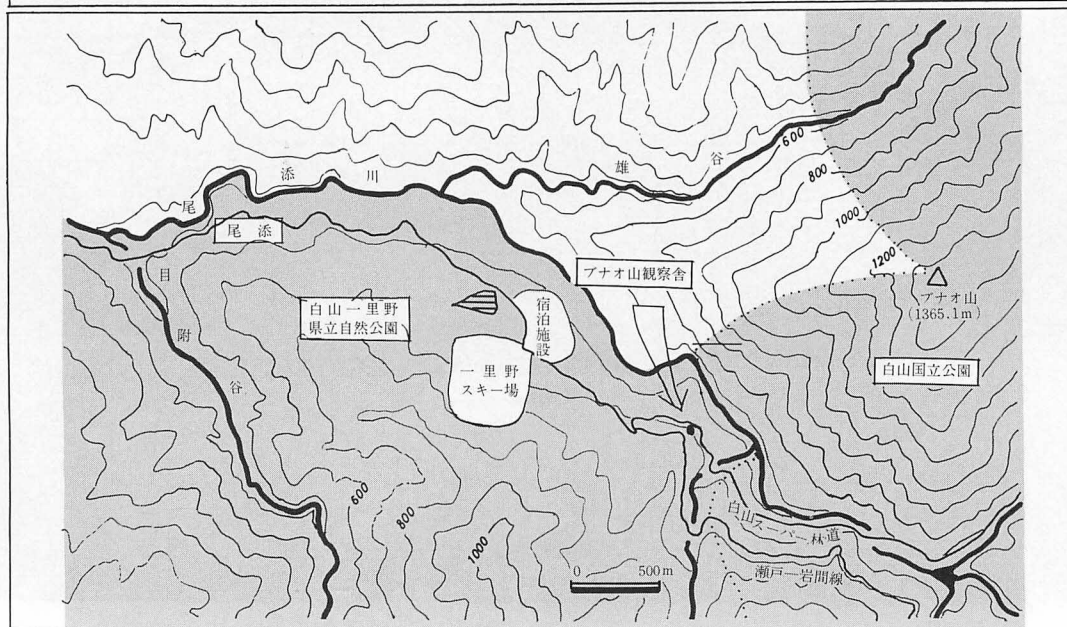
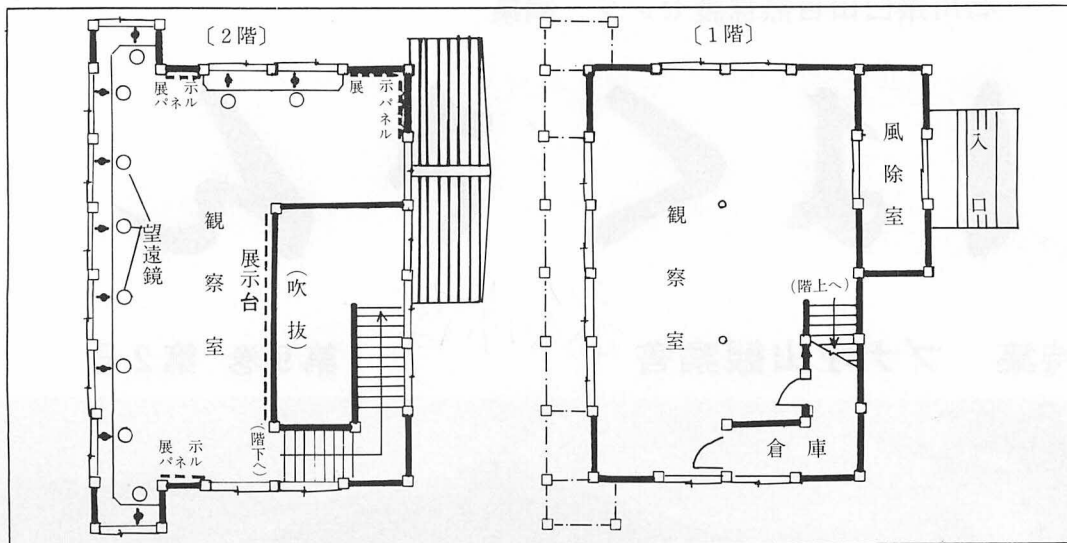


ブナオ山観察舎

石川県石川郡尾口村一里野に、今年12月上旬完成予定のブナオ山観察舎は、哺乳類や鳥類を観察できる、日本最初の施設です。手取川支流の尾添川左岸に建設されるこの観察舎からは、対岸の山毛櫨尾（ブナオ）山に生息する野生動物を見ることができます。

ブナオ山は、文字どおりブナを主とする落葉広葉樹や山地高茎草原におおわれ、また、深い溪谷と冬期の豪雪のために人間世界からは隔離されています。このためブナオ山は、クマ・サル・カモシカ・キツネ・テンなどの哺乳類やイヌワシ・カラ類といった鳥類にとって、格好の生息地となっています。

野生動物の生息環境が増々侵されている中で、ブナオ山一帯は数少ない動物の聖域（サンクチュアリー）となっています。動物園のような人工施設でしか動物を見ることができなくなった現在、ブナオ山を望む野生動物観察舎は、貴重な自然教育の場を提供することになるでしょう。



名 称 石川県白山自然保護センター
ブナオ山観察舎

所在地 石川県石川郡尾口村尾添地内(一里野)
(スキー場より徒歩約20分)

開館日 11月20日～5月20日, 年末年始休館
(昭和56年は12月8日より開館)
土・日曜, 祝日はセンター職員常駐
悪天候時は休館することがあります。

開館時間 午前10時～午後3時

ブナオ山観察舎開館にあたって

石川県環境部長 越 島 良 三

豊かな自然に恵まれた石川県には、数多くの野生動物が生息しています。特に白山周辺は、国立公園に指定されていることもあって、野生動物の宝庫です。クマ・カモシカ・サル・イヌワシといった動物は、県内では主に白山山系に住んでいます。これらの動物の調査・研究については、これまで白山自然保護センターや白山調査研究委員会により、分布や生態が明らかにされていますが、一般の人達にとっては、野生動物を直接見る機会はなく、まだまだ縁遠い存在となっているのが現状です。

こうした現状に鑑み、動物と人間がより身近な存在となるようにと作られたのが、このたび開館の運びとなった野生動物観察舎です。石川県石川郡尾口村一里野に建設されたこの施設は、石川県により企画・設計しました。鳥・猿以外の野生動物が見える施設としては、この観察舎は日本で最初の試みで、「ブナオ山観察舎」という名称がつけられています。建物敷地と、観察対象地となる山毛樺尾^{ブナオ}山は、すでに県有地となっており、さらに、ブナオ山の大部分は白山国立公園の第一種特別地域に指定されています。このため、ブナオ山一帯に生息する野生動物は、人間の影響を受けることはほとんどなく、この地域は動物が安心して生活できる聖域となっています。

今後ますます生息環境が厳しくなるとみられる野生動物を保護し、そして、一般の人達の自然教育に活用することは、環境行政を担当する者に課せられた役割だと思います。ブナオ山観察舎は、原生自然の中で生活する野生動物を利用者自身の眼で観察できる施設として、多くの人達に御利用いただけるものと確信しています。

動物たちとの出会い

伊 沢 絃 生

冬のブナオ山

それは、もう10年も前の、2月の、ある寒い晴れた朝だった。

尾添川をへだてて向いに、おわんを伏せた形のブナオ山が迫り、厚い雪におおわれた稜線の純白が、海の色を思わず冷たいダーク・ブルーの空に、神々しい輝きを放っている。

ブナオ山の南斜面は、山頂部はなだらかなのだが、途中から急激に角度を増して、最後はほぼ垂直に、尾添川の谷底に突きささる。今私のいる所から、巨大な急斜面の全体が、一望のもとに見渡せる。そこに深い大きな谷が刻まれていないからだ。

急斜面には、たてに真すぐな、太いなだれ道が、いく筋か走り、私の正面に見えるのが、その一つ、オオノマ谷である。

オオノマ谷の兩岸、より谷底に近い一帯の雪は、なだれ落ちて、黒い地肌が出ている。

そこは、ナバタといって、木が生えておらず、雪のない季節は草原である。冬に雪が降り積ってても、ここだけはすぐに消える。しかも冬のナバタの枯草の中には、春に伸びる草の芽があり、秋に落ちた木の実が詰まっている。

ナバタの中に、私は一群のサルを発見する。皆が、枯草をかき分けて、木の実拾いに熱中している。50頭が数えられる。双眼鏡のピントを一つ一つに順に合わせいき、サルの行動を観察する。尾をピンと立て、威張った振舞いをしている「ボスザル」はいない。少し離れた木のとっぺんに登って、注意深くあたりを見回し続ける「見張りザル」もいない。食物にありつけない、みじめな「周辺部のオ

スザル」の姿もない。ケンカも起こらない。どのサルもが落ち着いた、とても平和な表情をしている。

眼前に展開している光景こそ、まぎれもないサルの野生の生き方である。

ならんで木の実拾いをしていた二頭のサルが、チラッと左手前方を見やる。サルから20メートルほど先に、三頭のカモシカの姿がある。サルはカモシカをほんの一瞬チラッと見ただけだが、カモシカはそこで、突っ立ったまま、5分以上も、じっとサルを見続ける。

三頭のカモシカのうち、二頭は大きく、黒っぽい色をしている。もう一頭はひどく小さくて白っぽい。小さいカモシカは昨年春に生まれた子供だ。やがて三頭は、のんびりとナバタの草をはみ始める。

それから一時間以上も、サルとカモシカは、たがいにいさかうことなく、ナバタで採食を続けた。

その時、小さい黒い点が、オオノマ谷から100メートルほど上流の、雪の敷き詰めた真白い斜面を、ゆるやかなジグザグを描きながら登っていくのを発見する。サルにしては細長すぎる。

双眼鏡をあてる。黒い点はキツネだった。キツネは、大木の根元にある雪の洞の一つ一つに、首を突っ込む。洞にひそむウサギを探しているのだろうか。ナバタのサルたちは、キツネを気にしている様子は全くない。

さらにキツネが登っていく先に、別の二頭のカモシカが、低い木の芽を、背伸びして食

べている。キツネはカモシカの5メートルほどの所を通過する。カモシカを見ようともしない。二頭のカモシカは、キツネに気がついてから、さっきナバタのカモシカがサルに対してやったように、キツネの動きをじいっと見やっていた。

キツネはさらに斜面を登って、木立の中に消える。カモシカも我れにかえって木の芽を食べ始める。

そのはるか上、紺碧の空に、イヌワシが一羽、勇壮な輪を4回描き、ゆっくりと稜線の向う側へ去る。

再びナバタのサルたちへ、双眼鏡を戻す。満腹したのか、広いナバタの端のあちこちに、三頭、四頭といったサルのかたまりが見られる。気持良さそうに、うたた寝したり毛づくろいし合ったりしている。

その近くに、二羽のヤマドリが、低く滑空して下りる。尾の長い方が雄だ。ヤマドリは、サルを避けるようにしながら、ナバタを動き回り、ひとしきり木の実をついばみ、上流へと飛び去る。ヤマドリの顔が、日の光をとらえて、みごとな朱色に輝くのを見た。

私は、この日に坐った場所に、以後ほとんど毎年、冬の日々に、もう百回以上は坐ったことになるだろう。そして眼前に展開する動



冬の観察会でブナオ山を望む

物たちの平和なドラマを、数限りなく見た。

そこには、常に感激と発見の喜びがあった。野生の世界は見るたびに新しく、神秘と驚異に満ちているからだ。

私がこの10年、坐り続けたその場所に、白山自然保護センターのブナオ山観察舎がオープンするという。野生動物の素晴しさは、教えられるものでなく、自らが発見するものなのだ。その発見を通して、自然への理解は確実に深まっていくだろう。それこそが自然教育の原点である。

観察舎の開設によって、多くの人たちが、野生の神秘と驚異の数々を発見する機会ができることを、私は心から喜んでいる。

(宮城教育大学教育学部)



ニホンザル



ニホンカモシカ

ブナオ山

ブナーミズナラ林

ブナとミズナラは、白山の山地帯(400~1600 m)を代表する樹木です。春の芽ぶきに始まり、夏の青葉、秋の紅葉、落葉した冬の木立ちと四季折々に姿を変え、山の景色に彩を添えます。早春の頃、他の樹木に先がけ、まっ先に芽をふきだすのがブナの木です。ブナの花や実はクマやサルなどの絶好の食物となっています。



ニホンカモシカ

普通1頭もしくは親子の2頭で行動します。行動範囲が限定される冬場は、1か所に停まっていることが多く、ブナオ山で最も観察できる機会が多い動物です。このような急な斜面でも、ニホンカモシカはひづめを使い、楽々と登り降りします。

ナバタ

ながい冬が終わり雪が消えると、急な斜面のあちこちに、いち早く緑が見えはじめます。冬期間、なだれが発生するため、樹木は生育せず、かわりにウドやアザミなどの高茎草原が広がります。エサの少ない春先、動物たちには格好のエサ場です。



尾 添 川

春

春の訪れは遅く、4月頃になっても山頂部や谷筋には残雪が、急な斜面にはナダレの跡がいたるところにみられます。日がたつにつれナバタの形成、ブナの芽ぶきと草木は少しずつ新緑の装いをなしてゆきます。

夏

日ごとに陽射しが強くなるにつれ、緑もその色を増してゆきます。春先に産まれた動物たちの子供はこの時期になると多くは独り立ちできるようになり、動物たちには一年中で最もにぎやかな時期と言えます。

景 観 図

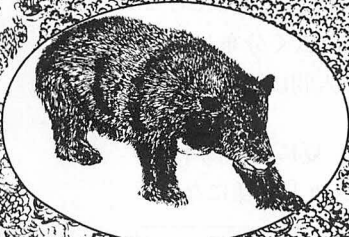
ブナオ山観察舎からは、尾添川をはさんで対岸にブナオ山の山腹南斜面が見わたせます。この斜面が動物たちの生活の場所です。真っ白い雪にほとんどおおわれてしまう冬から春先にかけてが、動物の観察の絶好の機会です。望遠鏡で動物たちを注意深く観察して下さい。

ブナオ山
(1365.1m)



イヌワシ
ブナオ山周辺には、2番の^{つがい}イヌワシが確認されています。広範囲なナワバリをもち、自分のナワバリには他のイヌワシを寄せつけません。よく見られる施回飛行は、上昇気流によって行なうものです。

ニホンザル
尾添川周辺に生息しているサルの群れのうち、ブナオ山を行動域にしているのはタイコの群れと雄谷の群れです。彼らは群れをなし、ブナオ山の斜面を移動します。他に、単独で行動する離れザルも時折観察することができます。



ツキノワグマ
冬場、クマは冬眠のための穴ごもりをしているので、ほとんど見ることはできません。しかし、春先、冬眠から覚めたクマは、ナバタにエサを求めてやってきます。

秋

紅色、黄色、褐色に色づいた草木が山一面をおお。秋の景色は、一年中で最も華やかなものです。草木は実を結び、次の世代のための準備をします。動物たちはこの植物の実を好んで食べ、長い冬の生活の備えとします。

冬

白山は世界的にも有名な豪雪地で、観察舎付近で積雪量が3~4mに達します。エサが少なく、ナダレが多発するこの時期、動物たちには最も厳しい、試練の時です。

ブナオ山観察舎からみられる

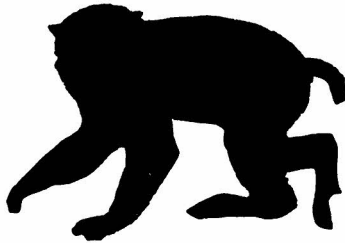
代表的な動物たち

ほ 乳 類

白山地域からは、ネズミやコウモリ類も含めて42種のほ乳類が知られています。ブナオ山観察舎のある標高600m付近の森には、そのほとんどの動物が分布しています。ここにすむ動物は、積雪3～4mにも及ぶ長く厳しい冬を越す能力をもったものばかりです。

ブナオ山は白山の山頂部まで続く白山国立公園と、国設白山鳥獣保護区の入口部分でもあります。ここで観察できるおもなものを紹介しましょう。

ニホンザル

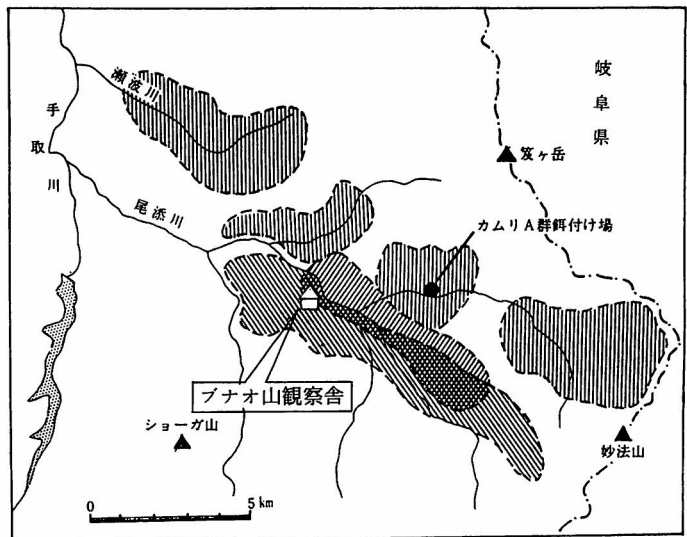


中宮温泉には野生のニホンザル、カムリA群（現在約80頭）が餌付けされて、春から秋にかけて観察できるようになっています。サルは親しみやすく、数も多い動物のように思われていることが多いのですが、白山ではカモシカやクマよりも数が少なく、尾添川、瀬波川、犀川の上流部で人里から遠く離れたところでしか群れを見ることができません。以前は広く分布していましたが、田畑を荒らすので害獣とされて、人間に追われて少

なくなりました。

石川県には6～8群が確認されていて、総数300～400頭と見られています。夏には標高1,000m以上のブナ帯上部に生活していますが、冬には谷間へ降りてきます。カモシカと同様になだれ跡で食物をとることが重要で、積雪の多い白山山系で急傾斜地の多い尾添川ぞいに群れが多いのはそのためと考えられています。冬はフジ、ケヤキ、サクラ、ブナなどの木の皮や冬芽をおもに採食しています。

ブナオ山周辺には、冬になると中の川の上流から下りて来るタイコA群とB群、そして雄谷の方から下りてくる雄谷の群れの3群が少しずつ重なった遊動域を持って行動しています。



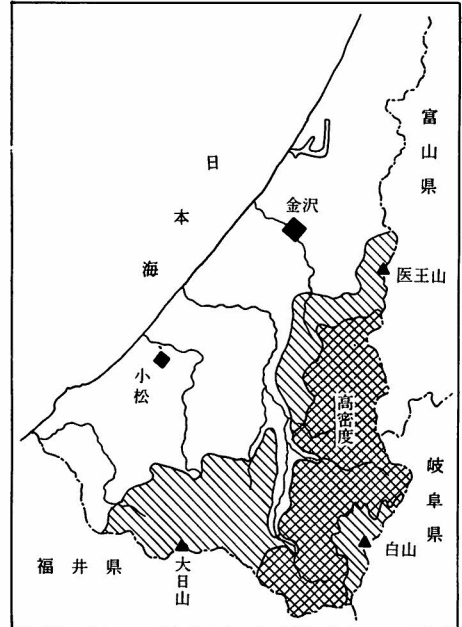
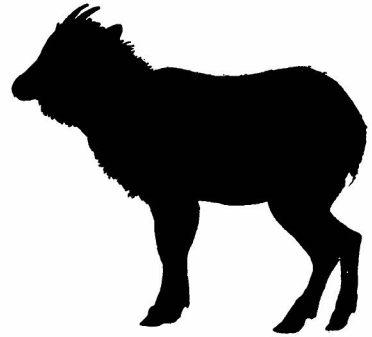
手取上流域のニホンザルの群れの分布

ニホンカモシカ

カモシカはわが国の有蹄類の中でただ一つ深い雪や急傾斜の山地に適応した動物です。石川県内では医王山から白山山系そして大日山にかけて分布し、特に手取川の支流、尾添川流域で密度が高く、ところによっては1km²あたり5頭以上が生息しています。

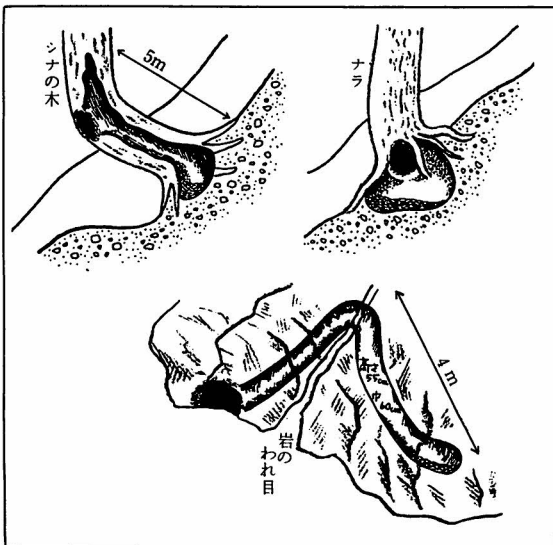
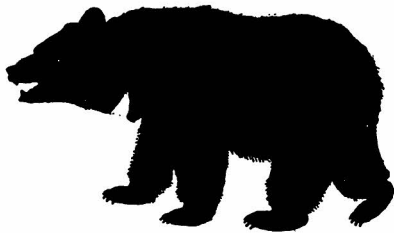
春には若葉、夏から秋にかけては、かん木の葉を主食としています。冬には雪の上に出ている木の枝から皮や冬の芽をかじっています。なだれの発生する場所では、地はだの出たところでササ、ハイイヌガヤ、アオキなどの青葉を食べることもできます、時にはなだれに会い圧死するものもいて、手取川流域だけで毎年10頭ほどの死体が見つかっています。

春に一頭を出産し、冬はその親子は連れだって歩きますが、家族単位以上の群れをつくることはありません。



石川県のニホンカモシカの分布域

ツキノワグマ

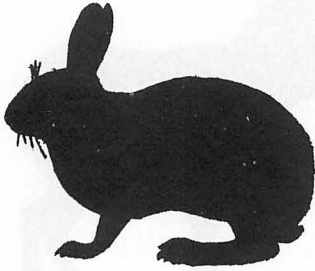


白山のツキノワグマの越冬穴

白山は広く原生林の残された山として知られるようになりました。クマはその原生林にすむ大型動物の代表といっても良いでしょう。手取川上流の白峰、尾口、吉野谷の3か村に300から400頭生息していると推定しています。

春はなばたの若草やブナの花、夏から秋にかけては木の実をおもに食べ、特に秋のミズキ、ヤマブドウ、ミズナラのカロリーの高い実は越冬にそなえて脂肪を貯えるために重要な食物です。

白山では12月から4月にかけて、山に雪が積っている間は、穴へ入っています。越冬には樹洞、岩穴、時には木の根の下の土穴などいろいろな場所を使います。トチ、ミズナラ、ヒノキ、シナなどの樹洞がよく使われますが、ブナの樹洞はほとんど使いません。越冬中に通常2頭の仔を産み、親はほぼ2年間、その子をそばにおいて育てます。



ノウサギ

ノウサギはどこの山にでもいる小動物です。この地方のものはトウホクノウサギという亜種とされており、白山のものは冬になると白い保護色の毛にかわり、テン、イヌワンなどの天敵から身を守っています。

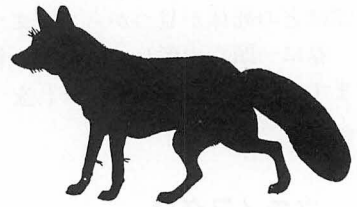
古くから山の狩猟の対象とされてきましたが、昭和50年頃からその数が少なくなっています。その原因としては寄生虫(豆状のう虫)の流行でないかと考えられています。雪の少ない能

登地方では、植林した杉の木の芽を食べて困っていますが、白山ろくでは杉の若木が雪の下に埋まってしまうため、被害はあまり問題となっていません。おもに夜活動して昼は木の根もとの雪の穴などにかくれています。

キツネ

単独または家族単位で生活しており、春の繁殖期になわばりを持つといわれています。ネズミ類や鳥類などの小動物を主食としています。全国的には狩猟獣となっていますが、石川県では杉の若葉を食害するノウサギの天敵として禁猟になっています。そのこともあってか、白山ろくでは過去10年ほどキツネの数が増加しており、ブナオ山でも雪の斜面を走る美しい姿を見ることがあります。

イヌ科の動物ではキツネの他にタヌキがありますが、冬はほとんど出歩かないので、めったに見ることはありません。

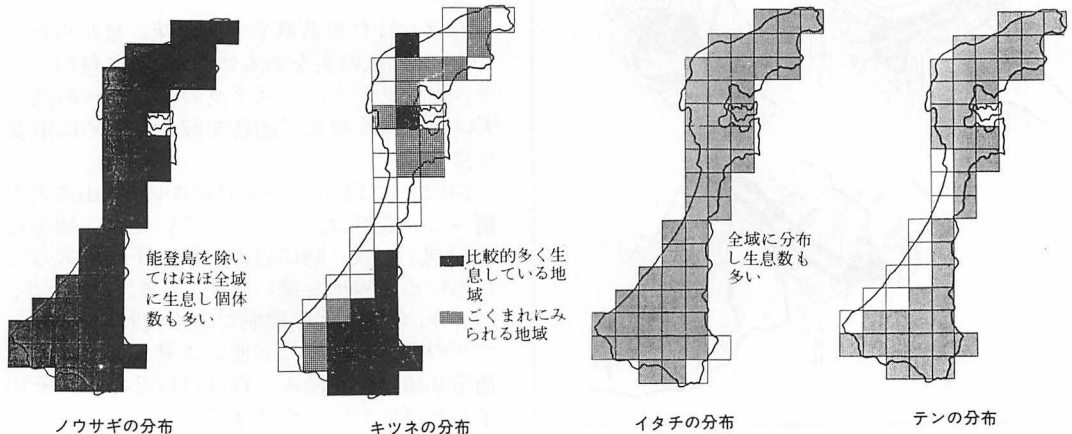
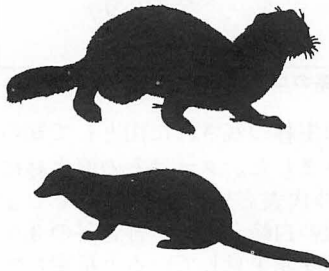


イタチとテン

白山に見られるイタチ科の仲間は、テン、イタチ、アナグマ、オコジョの4種です。このうちアナグマは冬見ることが少なく、オコジョは標高1,500 m以上の亜高山帯から高山帯にかけてだけ分布しています。

テンは尾も含めて全長60~70cmで、白山のものは夏は茶色の毛をしています。冬には美しい黄色にかわりキテンと呼ばれています。ネズミ、小鳥などの小動物が主食ですが、春から秋にかけては、キイチゴなどの果実もよく食べます。

イタチは一まわり小さく、オスで全長約45cm、メスは約30cmで、茶色をしています。ネズミ類、トカゲ、カエルなどを食べています。テン、イタチともに大へん敏捷で、シャクトリムシのように、はねるように走ります。また冬には雪の下にトンネルを掘って移動することもあります。時には昼でも雪の上を走るのが見られます。



鳥類

鳥の中には一年中同じところで生活しているものがありますが、多くは季節の変化とともにすみ場所を変えています。観察舎の周辺では、春から夏にかけてはオオルリやウグイス、ホオジロなどたくさんの鳥のさえずりを聞くことができます。しかし、観察舎がオープンする冬の間は、鳥の声も少なく姿を現わすのはごく限られています。雪にすっぽり埋まってしまう山の中では、鳥たちの食料となる草や木の実も少なく、昆虫も見つかりません。多くの鳥は、雪が少なく餌のある平野部や、南方の暖かい地方へ移動してしまいます。

それではどんな鳥が、冬の間観察舎の近くで見られるのでしょうか。一つは秋にシベリアなど北方の国から渡ってくるツグミの仲間などの冬鳥です。また夏の間は標高の高い山の中において、冬に降りてきた鳥や、一年中あまり移動しない鳥などもいます。それらはシジュウカラの仲間やキツツキの仲間、ヤマドリ、イヌワシなどです。ではその中から、観察舎でよく見ることができシジュウカラの仲間と、ブナオ山へ姿をみせるイヌワシについてお話ししましょう。

カラ類の混群

シジュウカラを始めとして、ヤマガラ、ヒガラ、コガラなどシジュウカラ科の鳥と、エナガ、ゴジュウカラなどを合わせてカラ類と呼んでいます。これらの鳥は、他の鳥と同様春から初夏にかけて、それぞれの番ごとに卵を産み雛を育てます。シジュウカラやエナガは観察舎の周辺でも繁殖しており、数も多い鳥です。またヤマガラも数は少ないながら普通に見られます。一方ヒガラやコガラ、ゴジュウカラは、標高の少し高い所のブナ林から亜高山帯にかけての林で繁殖しており、夏には観察舎の近くでは見られない鳥です。これらの鳥は雛が巣立つと、しばらくは家族で群れをつくり行動しています。しかし夏の終わり頃からは、ちがう種類どうして群れをつくるようになるのです。2種、3種、時にはカラ類以外にもコゲラ、ウグイス、キクイタ



ヒガラ(イラスト 竹中敏)



コガラ(イラスト 竹中 敏)

ダキなどもいっしょになって数種類の鳥が入り混じり、多い時には数十羽の大群にもなります。夏から冬にかけては山の中で鳴いている鳥は少なく、目につく種類はごく限られています。そんな中で、ひときわにぎやかで、愛きょうをふりまいてくれるのがカラ類の混群です。なぜちがう種類どうしが群をつくり、いっしょに行動するのかは詳しくはわかりません。林の中でそれぞれの持ち場を分け合って行動しながら、餌をさがしたり、外敵を早く発見したりすることに役立っているのでしょう。カラ類の混群は、冬の観察舎の主役となる鳥たちです。

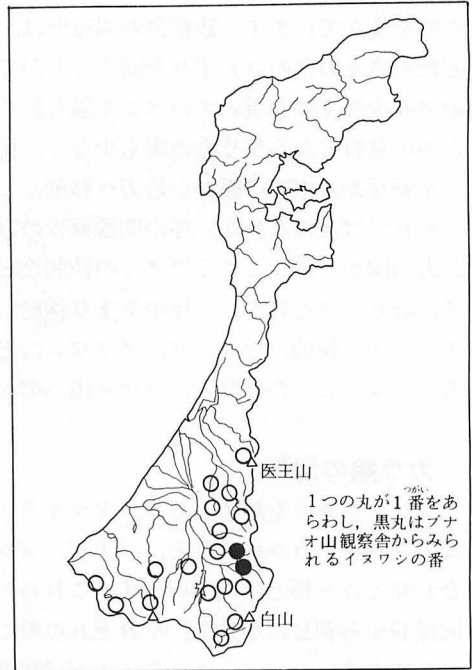
イヌワシ

翼を広げると2mにも達し、わが国の山に生息する鳥の中では最も大きな鳥です。石川県の県鳥であり、全国的にも数が少ないことから国の天然記念物として保護されています。

県内には、白山を中心として、北は犀川上流から医王山付近まで、また西は大日山周辺にかけて広く分布しています。しかし数は少なく、せいぜい40羽～50羽くらいです。そして大きな谷ごとになわぼりを持って、雌雄のペアで一年中同じところで生活しています。図に県内の生息地を示しましたが、この中で黒くぬった2つの地域のイヌワシを観察舎から見るができます。

観察舎の正面に見えるブナオ山へは、毎日のように現われます。注意してさがしていると山の上をせん回したり、斜面の林や高茎草原の上をゆっくり飛んでいたり、木に止っているイヌワシの姿を発見することもできると思います。観察舎が開かれている11月中旬～5月中旬は、ちょうど巣作りから産卵、そして雛が育っていく時期に当たります。それで、時には巣材を運んでいたり、ヤマドリやノウサギなどの餌をさがしているかも知れません。巣は急な斜面の岩だなに作られることがほとんどで、1ペアで数か所に持っていると言われています。

空を飛んでいる鳥が何であるかを確かめるのは、慣れないと難しいものです。特に遠くに小さなシルエットだけしか見えないときは大変です。イヌワシとよくまちがえやすい鳥にクマタカやトビがあります。ブナオ山付近にはクマタカはごく稀にしか現われませんが、トビはよく姿を見せます。図はイヌワシの成鳥と幼鳥及びトビの飛んでいる姿です。トビはイヌワシよりひとまわり小さく、尾の先端がほぼ直線状か、内側にへ字にくびれていることが特徴です。これに対しイヌワシの尾は外側へ丸味を帯びています。また幼鳥は翼や尾にはっきりした白斑が出ます。成長に伴ない白斑は不明瞭となります。ただ成鳥でも、光線の具合で、白っぽい斑紋が見えることがよくあるので区別には注意が必要です。一日中空を見上げておれば必ず姿を見せるイヌワシを、みなさんもさがしてみてください。



イヌワシの生息地分布



イヌワシ (成鳥)



イヌワシ (幼鳥)



トビ

R.F. PORTER 他 (1976) より

イヌワシとトビのちがいを

雪の上の昆虫

氷点下になる白山の雪上にも、元気に動く昆虫がいます。古くから雪上の虫は人々の注意を引いていました。江戸時代末期(1835)に、越後(今の新潟県)の人の書いた書物にも、雪のうへの昆虫の記事があります(本誌7巻3号に紹介があります)。

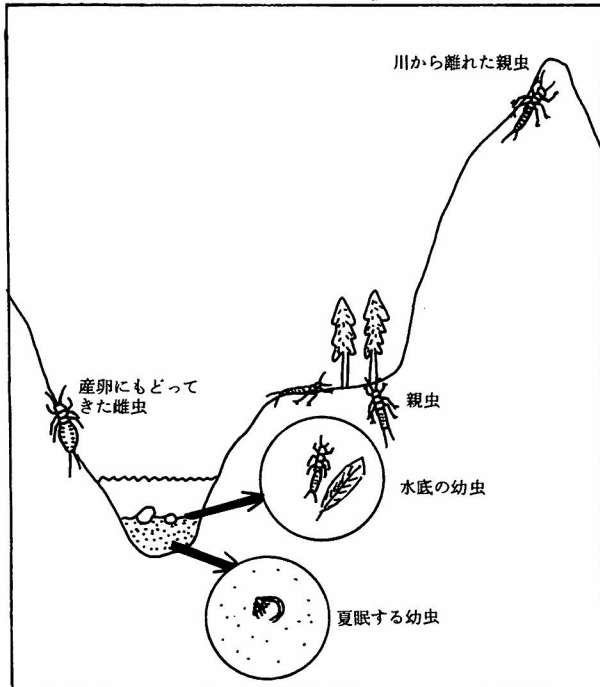
観察舎の周辺にいる雪虫で多いのは、水生昆虫のカワゲラの仲間で、翅のないセッケイカワゲラをはじめ、20種ほどがいます。翅の全くなくなったセッケイカワゲラモドキは、分布の西南限にあたるようです。

雪虫の体色に、黒っぽいものが多いのは、寒いところで、太陽の熱をよく吸収するためでしょうか。幼虫は川のなかで生活しますが、暑い夏(水温15~20℃ぐらいですが)は苦手とみえて、川底の砂の中で夏眠する種類も多くいます。

秋には、川の中で幼虫が数多く見られ、雪の降る冬から春にかけて、親虫になります。他の昆虫にみられない風変りな生活史です。

昆虫は、翅を使って空中を飛んで移動するものが多いのですが、翅のない雪上のカワゲラはどうして移動するのでしょうか。白山では、翅のないカワゲラのほうが、翅のある種類より、川から離れた尾根や頂上でみつかることが多い。雪の上のカワゲラを採集すると、翅のない種類のほうが、よく動きまわることが判ります。どうやら、1cmもない虫が歩いて、川から数百メートルから1kmも移動するようです。

移動する能力も驚くべきものですが、虫達はいったい何を目標に、川から尾根へ、また尾根から川へ産卵のため移動するのでしょうか。太陽を磁石のかわりに使っているという説もありますが、この小さな虫の雪原での移動は、科学的には解明されていません。



セッケイカワゲラの一生

夏眠中の幼虫：卵からかえった幼虫は、砂の中にエビの様な格好で眠り続ける。

水底の幼虫：水中の落葉などを餌にする(秋~冬)。

親虫：雪上で餌を探す。雑食性と思われるが、共喰いもする。成熟すると雪上で交尾する。

無翅の親虫：頂上や尾根でみつかるのは、翅のない種類が多い。

成熟した雌：卵で腹をふくらませた雌は、産卵のために川へ戻る。

雪の上の動物観察

数メートルの雪に埋れた冬山でも、動物たちは懸命に生きています。吹雪のあい間、雪の上に彼らの暮しの跡を見つけることができます。エサを探しまわっているキツネやテン等の足跡やフン。氷点下の温度で活動する昆虫のかわりものもいます。雪の上を注意深く見てみましょう。



雪山の自然観察では、暖かくて動きやすい服装が第一です。セーター、キルティング、毛の帽子、そしてそのままでも書ける五本指の毛手袋が必需品です。足元は厚手の靴下に長靴が適当です。竹や木を丸く曲げたカンジキや、長靴に雪の入るのを防ぐシュバツもあれば便利です。

キツネの足跡

足あとから動物の種類をみわけるのに、形、大きさ、並び方が大事なポイントになります。キツネの足跡は、一見したところイヌのものに似ていますが、普通イヌのものより小さい。4本の足の指がはっきり見え、足跡が図のように一直線に並んでいるのが特徴です。





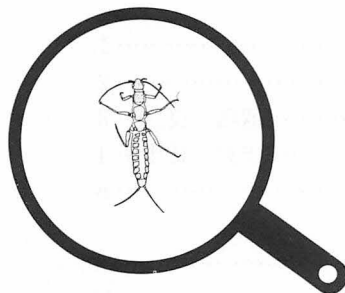
テンの足跡

足跡は小さく、円形をしています(径約3~4cm)。雪の上では、指の形がはっきりみられることは少なく、2つずつならんだ足跡が、ほぼ等間隔に続いているのが特徴です。



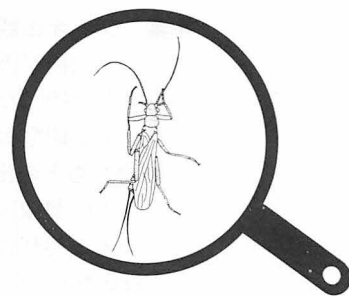
ノウサギのフンと足跡

動物のフンは、その種類によって形や色が異なります。動物によっては、季節によって異なるものもあります。ウサギのフンは球を押しつぶしたような形で、直径約1cm。1ヶ所に普通5~6粒集合しており、冬山では最もみる機会が多いものです。



セッケイカワゲラ

体長は1cmほど、体は黒色。羽は痕跡的なものがあることもありますが、肉眼ではみえません。はじめてこの種類が採集されたのは、日本アルプスの真夏の雪溪で、この名前がつけられています。よく似た種類に、セッケイカワゲラモドキがあります。白山麓では、1月末から3月ごろに出現します。



オカモトクロカゲワラ

体長は1cmほどで、体は黒から黒褐色。翅の長さには長短がありますが、白山麓では長翅型しか発見されていません。

雪上の有翅のカゲワラの種類は多く、尾のないオナシカワゲラ類、尾の短いミジカオカワゲラ類、クロカゲワラ類など20種類以上が白山麓にいます。みわけるには、虫めがねが必要です。

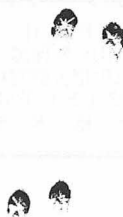
キツネ



テン



ウサギ



たより

昨夏は天候が不順でしたが、今夏は天候に恵まれ、白山の夏山の宿泊者数(7～8月)は室堂で21,000人、南竜地区で5,074人と、昨年と同じ時期にくらべて約2割の増加です。最近はブームとまではいかないまでも、白山の登山者は徐々に増加しています。交通路や登山道が整備され、大人から子供まで気軽に登れるというイメージが強くなっていますが、3000m近い高い山ですから、天候の変わり方も早く、登山には十分な注意が必要かと思えます。今夏、登山中に病気になられ救助された方が2、3あり、そのうちには無理な登山計画が原因したものもあると聞きます。今後共、登山は慎重に行なって下さい。

本紙の第8巻第2号の「たより」の欄でお知らせした野生動物観察舎(ブナオ山観察舎)が12月8日に開館の運びとなりました。これまで餌付けされたサルを観察する野猿公苑は全国に数多く作られています。今回のようにサルの他にもクマやカモシカの動物達を野生のままに観察する施設は、全国的にもはじめての試みといえます。観察舎内には10基の望遠鏡と野生動物についての解説パネルが用意してあり、野生動物の観察がはじめての方でも、観察の機会が得られることと思います。本号は観察舎での動物観察のためのガイドブックとなるように編集したものです。この「はくさん」を持って、ぜひ一度お出かけ下さい。団体等で利用される場合にはその旨センターへご連絡願えれば、センターの係員が同行いたします。

7月27～28日に瀬戸内海国立公園加太・友ヶ島(和歌山県)で開催された第23回自然公園大会で、地元白山の自然公園指導員の下家智見さんが、環境庁長官賞を受賞しました。下家さんは自然公園指導員を昭和40年からなされており、公園利用者に対する安全登山や利用マナーの指導や自然解説などを積極的になさっています。現在、県の林業公社の嘱託としてお働きになり、私共とは職場に近いこともあり、親しくおつきあいねがっています。今後共、ご活躍を願うしだいです。(東野)

目 次

特集 ブナオ山観察舎

ブナオ山観察舎	1
観察舎位置図及び見取り図	2
ブナオ山観察舎開館にあたって	越島 良三 3
動物たちとの出会い	伊沢 紘生 4
ブナオ山景観図	6
ブナオ山観察舎から見られる代表的な動物たち	
ほ乳類	8
鳥 類	11
雪の上の昆虫	13
雪原での動物観察	14
た よ り	16

はくさん 第9巻 第2号(通巻39号)

発行日 1981年11月20日
発行所 石川県白山自然保護センター
石川県石川郡吉野谷村市原
☎920-23 T E L 076195-5132
印刷所 株式会社 橋本 確 文 堂